



IWAMI CHISUIKAN HIGH SCHOOL IWAMI CHISUIKAN HIGH SCHOOL IWAMI

## 研修報告

今月27日に益田市で開催された平成29年度島根県私立中学高等学校人権・同和教育研修会に、本校から瀧本先生、原先生、伏谷先生の3名の先生方が出席されました。研修を終えての感想を掲載いたします。他の先生方も、ぜひ直接話をさせていただいて、学びの共有を図っていただきたいと思います。

## 研修内容

- ①人権・同和教育研修会・・・「フリースクールの現状から見えるもの」
  - ②青少年健全育成研修会・・・「表現とコミュニケーション」講話とワークショップ
- 学んだこと・感想・・・

午前の部では「フリースクールの現状から見えるもの」という題目でNPO法人志塾フリースクール理事長 山本了輔さんの話から始まった。自身の高校時代のボランティアの体験からカウンセラーを目指し、そこで、学校に行けない子供を対象とする「フリースクール」という言葉に出会い、大阪の西成区という場所で会社を興した。理由はそこが日本でも多くの問題を抱える地区であり、ここで出来れば大丈夫！という思いから始まった。その後、現在の学校現場で起きている発達障害やLD、アスペルガーと言われる子供たちとの付き合いや指導の仕方を説明された。ここで特に心に残ったことは、現在、教育現場でよく使われる「発達障害」という用語は、英語から訳されるときにこうなってしまうているが、本当は「発達課題」と呼ばれることだ。「課題は訓練で治っていく」という言葉は強く心に残っている。もう一つ、「今後の私学は二極化していく！」という話があった。それは「超進学校」か「面倒見の良い学校」という話であった。ここも私学の教員として考えさせられるところであった。午後からはNPO法人「あしづみ」の園山士筆先生と有田美由樹先生の講和とワークショップでゲームをしながら、コミュニケーションの大切さを感じながらゲームを楽しんで行った。多くのゲームをする中で、日本人のコミュニケーション能力の低さを実感したが、ワークショップをしながら周囲も自分も積極的にコミュニケーションをとろうとする変化も起こってきた。講話の中で、「今の子供は失敗しないようにと常に考えながら行動している。ゲームを交え、失敗してもよい！という空間を楽しみながら構築し、コミュニケーションをとるようにしていけば、子供の新しい一面が見えてくる」という言葉は正にその通りだと感じた。今回の研修で得た知識を知恵として活用して今後に活かしていきたい。

・・・瀧本先生

本校にも様々な発達障害を持って学校生活を送っている生徒があり、なかなか個々に対応が難しいが、「発達障害は訓練により補える」ということを聞き、訓練の方法などが聞けたので今後に役立てていきたい。また、他の学校での取り組みの中で、大阪府下の高校で実施されている「えんがわプロジェクト」は、校内で空いている教室をフリースクールに提供し、授業の支援やトラブルの解消・基礎学力の定着を行っているという活動で、とても興味を持てた。担任や教科担だけでは限界があるので、利用できれば、生徒にとっても安心して学校生活が遅れるのではないかと思った。午後の研修では日本文化にみられる様々な「壁」の事例を挙げてコミュニケーション能力を鍛えるためのゲームをおこなった。自分自身も、日本文化の壁の中で思い当たることがあり、難しいことを改めて感じた。ゲームを通して楽しみながら、コミュニケーションが取れるようになるなら、生徒にもできるかなと感じた。

・・・原先生

フリースクールでは不登校の子供を受け入れており、既存教育の補完的役割を果たしている。基礎学力の向上、コミュニケーション網力の醸成、本人と家族と学校の仲立ちの3点で、学校をサポートすることを目指している。不登校のきっかけは、OD（起立性調節障害）、広汎性発達障害、いじめ、軽度知的障害、精神障害などがある。発達障害という言葉は適切ではなく、発達課題と呼ぶべきである。なぜなら適切なトレーニング（Social Skill Training）で傾向が改善されるからだ。発達障害には広汎性発達障害（自閉症、アスペルガー症候群）、AD/HD（注意欠陥多動性障害）、LD（学習障害）、OD（起立性調節障害）、パーソナリティ障害などがある。アスペルガーはいまいちな表現が理解できず、人の気持ちや表情を読むことができないので、三択のコミュニケーションゲーム（パソコン）を通して人の気持ちを理解したり、場面や状況ごとに自分の行動を振り返ることが大事である。AD/HDは年齢と共に多動は落ち着き、ADDへと変わる。忘れ物が多く、予定を忘れてしまう。集中力にかけないので、10分授業して3分休憩することを繰り返す行方スポット授業や、学習をゲーム化することで改善がみられる。LDは文字が動いて（踊って）見えることから読字障害があることが多い。書き方（書き順）を言語化してやったり、音声入力やタイピングなどの工夫が必要である。不登校がきっかけで引きこもりになった人は11.9%で、39歳以下の無業者（ニート）は240万人と言われており、中学から高校に進学させる意味は労働力不足の解消の点で非常に大きい。公立高校は、再編化が進み、私立高校へのニーズは超進学校が面倒見がいいから二分され、面倒見の良い高校の志願者が増加していきだろ。本校でも発達障害があると思われる生徒が増加していると感じられる中で、「困った子」ではなく「困っている子」と考えを改め、適切な指導を行い、サポートしていくことが必要な課題であると思うと考えさせられた。

まず初めに、NPO法人あしづえ（劇団あしづえ）の理事長「日本人の暮らしに立ちはだかるコミュニケーションの壁」という演題の講話があった。その「日本文化の壁」とは次の6つである。様式文化の壁、省略文化の壁、時間文化の壁、性別・年齢文化の壁、地域文化の壁、国語教育の壁。私達は学校で国語教育を受けてきたが、日本語教育は受けていない。国語教育では「読む・書く」を習うが「聞く・話す」は習ってこなかったということで、正しい（人に伝わる）話し方についてお話しされた。次に副理事長による「表現コミュニケーションワークショップ」で、目的別に様々なゲームを実際に体験した。それはコミュニケーション能力を培うための初歩の初歩のゲームで、段階に応じてまだまだたくさんのゲームがあるそうだ。クラスの関係づくりや団結感や一体感を作るのに適していると感じた。今回の研修では、新たな知識を得ることで物の見方や視点が少し変わるきっかけとなった。研修で得たものをクラス運営や教科指導などで活かしていきたい。

・・・伏谷先生